

「あなたと私は仲が良い」？
—大学生の攻撃的ユーモア利用とその背景—

宮代 こずゑ, 富田 茉林

宇都宮大学教育学部研究紀要 第70号 別刷

2020年3月

「あなたと私は仲が良い」？

—大学生の攻撃的ユーモア利用とその背景—

“We are close”? An investigation about the using aggressive humor and its background

宮代 こずゑ[†], 富田 茉林[‡]

Kozue MIYASHIRO and Marin TOMITA

からかい・いじりなどは攻撃的ユーモアとして分類されるが、いじめとの関連が指摘されている。一方でこうした攻撃的ユーモアは、多くの人が日常的に使っている。もし相手を傷つけることを意図していないのであれば、なぜ、どのように、ヒトはこうしたユーモアを使用しているのだろうか。この点について検討すべく、本研究では質問紙調査を実施した。結果より、攻撃的ユーモアはすべての使用動機において、親しくない友人よりも親しい友人に対してより多く使われること、攻撃的ユーモアの使用動機としては「相手と仲良くなりたい」という親和動機が最も多いことが示された。

キーワード：攻撃的ユーモア，友人関係，コミュニケーション

1. 問題と目的

ユーモアは、「おかしさ、おもしろさ」という心的現象を示すものとして定義することができる（上野，1992）[1]。ユーモアに関連した研究は数多くあるが、上野（1992）[1]では、そうしたユーモア現象を6つの理論に分類した。その中の1つである優越感情の理論ではユーモアと攻撃性の関連を指摘している。その一方で、ユーモアとストレス緩和についても言及しており、ユーモアが様々な側面を持つことを示している。

また、上野（1993）[2]は、ユーモア表出に焦点を置き、第1に「遊戯的ユーモア」、第2に「攻撃的ユーモア」、第3に「支援的ユーモア」の3つのタイプのユーモアがあるとした。第1の「遊戯的ユーモア」は、だじゃれなどの言葉遊び、軽い冗談、ちょっとした日常の出来事などである。内容自体にはあまりメッセージ性のないものなどは、主に遊戯的ユーモアを生起させるユーモア刺激として利用されることが多い。第2の「攻撃的ユーモア」は、風刺、ブラックユーモア、皮肉、過激な刺激、暴力的な刺激、嘲笑、などを含み、優越感の獲得や攻撃によるカタルシスを得る効果があるとされている。第3の「支援的ユーモア」は、主に自己客観視によって自己を含む状況からユーモアを見出したり、自己洞察によって得た結論の表現をユーモア刺激として提示したりすることにより、状況や自己に対する統制感をより強く得させる方法が利用される。このような洞察体験や克服感や自己客観視が伴う場合、特に困難、失敗、災難等の状況において、絶望感や動揺によって主体性を失うことを防ぎ、平静さや落ち着きへの

[†] 宇都宮大学 教育学部（連絡先：miyashiro@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

[‡] 宇都宮大学 教育学部 卒業生

きっかけを与える効果をもつとされている。

しかしながら、見かけ上は「攻撃」の形をとっていても、相手を和ませたり笑わせたりするために発せられる場合もある。またこうしたタイプの攻撃的ユーモアには、「自分はあなたをからかえるほど親しみを感じている」という間接的メッセージ (metamessage) を含むため、相手に心地よさを感じさせることも指摘されている (Norrick, 1994) [3]。

塚脇・越・樋口・深田 (2009) [4] はユーモアが表出される動機について検討した。この研究では、ユーモアが表出される動機を、他者の価値観、人間性、態度などを探るための動機である「関係構築動機」、他者への不満や苛立ちを伝達するための動機である「不満伝達動機」、他者との関係性を向上あるいは維持するための動機である「他者支援動機」、他者の自分に対する印象を操作するための動機である「印象操作動機」、自己を援助するための動機である「自己支援動機」の6つに分類している。そして、たとえ攻撃的な形態のユーモア刺激であったとしても、他者や自己を支援するために表出されうること示した。

このことから、コミュニケーション場面において「攻撃的ユーモア」が表出される動機は多岐にわたることが示される。これらの動機について、塚脇・越・樋口・深田 (2009) [4] は以下のように述べている。「支援的な動機に基づくユーモア刺激の表出は精神的健康にポジティブな影響を与えるという知見から推察すると、攻撃的な形態のユーモア刺激の表出であっても一概に精神的健康にネガティブな影響を及ぼすのではなく、動機によってはポジティブな影響を及ぼす可能性も考えられる」。一方で、「不満伝達動機」による攻撃的ユーモアの機能については、「他者への不満や苛立ちによって高まった攻撃性を、ユーモア表出によって相手に伝達することで発散している」と論じており、他の動機による攻撃的ユーモアとは区別されるべきものと考えられる。

近年、いじり・からかいといじめとの関連については多く検討されており、攻撃的ユーモアについても、他者を攻撃したり中傷したりするネガティブな面だけが強調されがちである。しかしそうした観点のみでは、多くの人が日常的なコミュニケーションの中で攻撃的ユーモアを用いている理由について説明が出来ないばかりか、誤った結論(例えば「人は本質的に相手を傷つけたいという性質がある」のような)へ結び付けられかねない。

そこで本研究ではユーモアの中でも特に攻撃的ユーモアに着目し、その動機ごとの使用頻度について調査を行う。また、大学生が普段のコミュニケーション場面において、相手との親しさをはかりつつ、こうした攻撃的ユーモアの使用を調整しているかどうかについても検討する。

2. 方法

2-1. 調査協力者

宇都宮大学生192名(男性73名、女性119名、平均年齢19.48歳、SD = 1.89)であった。

2-2. 実施手続きと倫理的配慮 大学の講義時間を利用して調査対象者に一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。質問紙記入には15～20分程度の時間を要した。その際、調査対象者に対して、回答は任意であること、回答を拒否したり中断したりできること、それによって不利益が生じないこと、個人が特定される形で公表や発表をしないことを紙面に明記した。また質問紙配布と同時に口頭で説明をした。

2-3. 調査内容

2-3-1. フェイスシート：所属、年齢、性別の記入を求めた。

2-3-2. 対人関係におけるユーモアの使用頻度：ユーモアの動機項目について塚脇（2011）[5]によって開発された尺度をもとに作成した。攻撃的ユーモア表出について、5つの動機の下でそれぞれ普段どの程度よく使っているかについて、全33項目4件法（1: 全く用いない～4: よく用いる）で質問した。動機は、親和動機（例：場を和ませるため；10項目）、印象操作動機（例：面白い人だと思われたいため；9項目）、他者支援動機（例：落ち込んだ相手を楽にさせたいため；6項目）、対人探索動機（例：相手がどんな人かをさぐるため；4項目）、不満伝達動機（例：自分の不満を伝えるため；4項目）であった。またこれら33項目について、親しい友人を想定した場合と、あまり親しくない友人を想定した場合とで、それぞれ分けて回答させた。

同様に、自虐的ユーモア表出について、印象操作動機（16項目）、他者支援動機（10項目）、自己支援動機（例：共感して笑い飛ばしてほしいため；9項目）の全35項目への回答を求めた。さらに遊戯的ユーモア表出についても同様に、印象操作動機（10項目）、対人探索動機（13項目）、他者支援動機（8項目）、自己支援動機（4項目）についての全35項目への回答を求めた。項目について回答を求めた。

攻撃的・自虐的・遊戯的ユーモアについての教示の例を Figure 1a～cとして示す。

攻撃的ユーモア表出：あなたが親しく感じている友人に対して、皮肉、からかい、嘲笑、ブラックユーモアなどの攻撃なユーモアを用いる場合を思い浮かべてください。そのようなユーモアをあなたは、以下に示した目的でどの程度の頻度で用いると思いますか。

Figure 1a. 攻撃的ユーモアについての教示例.

自虐的ユーモア表出：あなたがあまり親しく感じていない友人に対して、自分の失敗談、自分の欠点・弱点を笑い話にするなどの自虐的なユーモアを用いる場合を思い浮かべてください。そのようなユーモアをあなたは、以下に示した目的でどの程度の頻度で用いると思いますか。

Figure 1b. 自虐的ユーモアについての教示例.

遊戯的ユーモア表出：あなたが親しく感じている友人に対して、だじゃれ、たとえ話、空想話、とんち話、たあいもない日常のエピソードなどの、遊戯的ユーモアを用いる場合を思い浮かべてください。そのようなユーモアをあなたは、以下に示した目的でどの程度の頻度で用いると思いますか。

Figure 1c. 遊戯的ユーモアについての教示例.

3. 結果と考察

3-1. ユーモア使用頻度の基礎統計量

相手との関係性および使用動機別に見た各ユーモア使用頻度の基礎統計量を Table 1 へ示す.

Table 1. ユーモア使用頻度についての基礎統計量

相手との関係性	ユーモアの種類	動機	<i>M</i>	<i>SD</i>
親しい	攻撃的ユーモア	親和	2.56	0.67
		印象操作	2.03	0.67
		他者支援	2.02	0.66
		対人探索	2.12	0.74
		不満伝達	2.29	0.72
	自虐的ユーモア	印象操作	2.33	0.68
		他者支援	2.64	0.68
		自己支援	2.38	0.72
	遊戯的ユーモア	印象操作	2.03	0.66
		対人探索	2.60	0.69
		他者支援	2.41	0.71
		自己支援	2.14	0.74
親しくない	攻撃的ユーモア	親和	1.67	0.76
		印象操作	1.55	0.64
		他者支援	1.69	0.72
		対人探索	1.47	0.63
		不満伝達	1.73	0.73
	自虐的ユーモア	印象操作	2.02	0.66
		他者支援	2.14	0.74
		自己支援	1.82	0.61
	遊戯的ユーモア	印象操作	1.81	0.75
		対人探索	2.26	0.77
		他者支援	2.03	0.77
		自己支援	1.83	0.71

3-2. 大学生は友人との親しさによって攻撃的ユーモア使用頻度を調整するか

大学生が、友人との関係性（親しい／親しくない）によって攻撃的ユーモアの使用頻度を変えているかについて検討すべく、友人との関係性を独立変数、攻撃的ユーモア使用頻度を従属変数とした対応のある t 検定を実施した。その結果、いずれの動機においても、親しい友人に対してより頻繁に攻撃的ユーモアを用いていることが明らかとなった（親和動機： $t(191)=17.764, p<.001$, 印象操作動機： $t(191)=11.112, p<.001$, 他者支援動機： $t(191)=13.007, p<.001$, 対人探索動機： $t(191)=11.458, p<.001$, 不満伝達動機： $t(191)=6.704, p<.001$ ）。

上記の結果から、攻撃性ユーモアは、相手との親しさが増すほどより多く使われることが示唆された。このことは、大学生が友人とコミュニケーションする際には、まず友人との親しさについて考慮し、距離感のある相手には攻撃性ユーモアの使用を控えているという解釈が可能である。しかし一方で、攻撃的ユーモアに限らずユーモア全般が、親しくない相手に使うには単純に敷居が高いということも考えられる。

そこでこの点について検討すべく、ユーモア使用頻度を従属変数、ユーモアの種類（攻撃・自虐・遊戯的）および相手との関係性（親しい・親しくない）を独立変数とした二要因参加者内分散分析を実施した。その結果、ユーモアの種類の主効果（ $F(2, 383)=76.752, p<.001$ ）であり、多重比較の結果、攻撃的ユーモアが他の2つのユーモアと比べて優位に使用頻度が低かった（ $ps<.001$ ）。相手との関係性の主効果（ $F(1, 191)=91.515, p<.001$ ）も有意であり、ユーモアは親しい友人に対して、親しくない友人よりも頻繁に使用されることが明らかとなった。

さらに交互作用（ $F(2, 383)=116.923, p<.001$ ）が有意であり単純主効果検定を実施した。まず友人との関係性別に見たユーモアの種類の効果について述べる。親しい友人に対する攻撃・自虐・遊戯的ユーモアの使用頻度に差があり（ $F(2, 764)=30.596, p<.001$ ）、多重比較の結果、すべての差が有意（ $ps<.001$ ；自虐>遊戯>攻撃）となった。親しくない友人に対しても、ユーモアの種類の単純主効果が有意であり（ $F(2, 764)=164.459, p<.001$ ；自虐>遊戯>攻撃）、多重比較の結果、全ての差が有意であった（ $ps<.001$ ）。

次にユーモアの種類別に見た友人との関係性の単純主効果について述べる。まずは攻撃的ユーモア使用頻度については、相手との関係性が及ぼす効果が見られ（ $F(1, 573)=24.077, p<.001$ ）、親しい相手に対して攻撃的ユーモアをより頻繁に使っていることが確認された。自虐的ユーモアについても、友人との関係性の単純主効果（ $F(1, 573)=312.760, p<.001$ ）は変わらず、親しい相手に対して自虐的ユーモアをより頻繁に使っていることが示された。一方で、遊戯的ユーモアにおいては、上記のような友人との関係性による使用頻度の差は見られなかった（ $F(1, 573)=.608, p=4.358$ ）。

水準ごとの平均値を Figure 2 に示す。

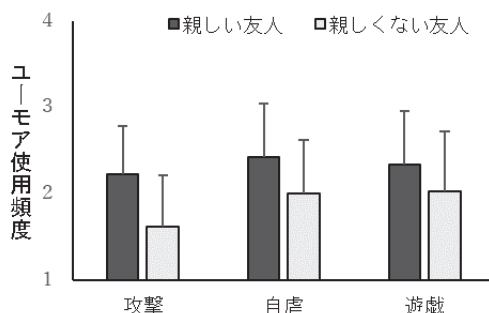


Figure 2. 相手との関係性による各ユーモア使用頻度の違い。エラーバーはSD.

これらのことから、大学生は単純に親しい相手に対してユーモア全般をより多く使っているというわけではないことがわかる。大学生はユーモアの中でも攻撃的ユーモアおよび自虐的ユーモアについては「親しくない相手には使いにくい（あるいは使うべきではない）もの」と考えており、相手との関係性を慎重に測りつつ、その使用を調整していることが考えられる。その背景にはおそらく、相手とはあまり親しくない場合、相手のユーモアの好みがわからないため、自分が発した攻撃的ユーモアや自虐的ユーモアによって（たとえそのつもりがなくとも）相手を傷つけたり気まずい思いをさせてしまうなどのリスクがある。

そのリスクについて考慮した結果として、「親しくない相手には攻撃的ユーモアを使用しない」というリスク回避行動があるのではないだろうか。

3.3. なぜ大学生は攻撃的ユーモアを使うのか：ポジティブな使用動機

前項の結果からは、大学生が攻撃的ユーモア使用に伴う様々なリスクを自覚しつつも、親しい相手に対しては日常的にそれらを使っている姿がうかがえる。しかしそもそも、なぜそうしたリスクを冒してまで攻撃的ユーモアを使おうとするのだろうか。

この点について検討を行うため、攻撃的ユーモアの使用動機（親和・印象操作・他者支援・対人探索・不満伝達）および相手との関係性（親しい・親しくない）を独立変数、攻撃的ユーモア使用頻度を従属変数とした二要因参加者内分散分析を実施した。

その結果、まずは前項同様に相手との関係性の主効果が確認され（ $F(1, 191) = 254.567, p < .001$ ）、攻撃的ユーモアが親しい友人に対してより多く使われていることが示された。また使用動機の主効果が認められ（ $F(1, 191) = 28.515, p < .001$ ）、多重比較の結果、使用頻度が比較的低かった印象操作動機、他者支援動機、不満伝達動機の間には差が見られなかったが（印象操作-不満伝達（ $p = .072$ ）、他者支援-不満伝達（ $p = .115$ ）、印象操作-他者支援（ $p < .826$ ））、親和動機とその他の動機の間、および対人探索とその他の動機の間はそれぞれすべて有意であった（親和-印象操作（ $p < .001$ ）、親和-他者支援（ $p < .001$ ）、親和-対人探索（ $p = .005$ ）、親和-不満伝達（ $p < .001$ ）、対人探索-印象操作（ $p < .001$ ）、対人探索-他者支援（ $p < .001$ ）、対人探索-不満伝達（ $p < .001$ ））。

さらに交互作用が認められた（ $F(4, 764) = 35.410, p < .001$ ）ため、単純主効果検定の結果について以下に述べる。まず相手との関係性の単純主効果は、前項での結果同様いずれの動機においても有意であり（ $ps < .001$ ）、親しい相手に対してより多く用いていることが分かった。

次に使用動機の単純主効果は、相手との関係性にかかわらず有意であった（ $ps < .001$ ）。ただし多重比較の結果が相手との関係性により少し異なった。親しい友人が相手の場合、親和動機における使用頻度が他のいずれの動機よりも有意に高く（ $ps < .001$ ）、ついで対人探索動機における使用頻度が他3つの動機よりも有意に高い（ $ps < .001$ ）。残りの3つの動機（印象操作動機、他者支援動機、不満伝達動機）の間は有意ではなかった。

一方で、親しくない友人が相手の場合、全体的に差が小さくなっている。使用頻度が最も低い印象操作動機と他者支援動機の間は有意ではなく（ $p = .096$ ）、印象操作動機とその他の3つの動機の間、および他者支援動機とその他の3つの動機の間はそれぞれ有意であった（ $ps < .001$ ）。

水準ごとの攻撃的ユーモア使用頻度を Figure 3 に示す。

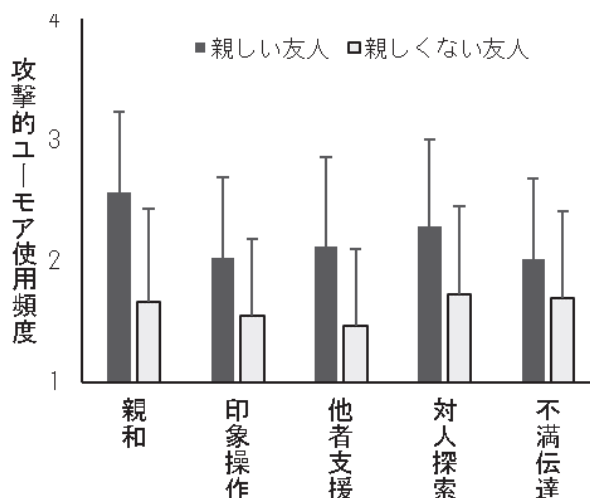


Figure 3. 使用動機・相手との関係性による攻撃的ユーモア使用頻度の違い。エラーバーはSD.

これらの結果からは、親しい友人に対しては「さらに相手と親しくになりたい」という動機の下で攻撃的ユーモアが多く使われていることが示された。また親しい相手に対する攻撃的ユーモアは、印象操作動機、他者支援動機、不満伝達動機のためには比較的使われておらず、親しくない相手であっても、印象操作動機および他者支援動機の下では他の動機と比べて攻撃的ユーモア使用頻度が低いことがわかる。他者支援動機の質問項目には「落ち込んだ相手を楽にさせたいため」や「相手を励ますため」というものが含まれているが、そういった相手がネガティブな感情を感じているような場面であれば、相手をさらに傷つけてしまう可能性のある攻撃的ユーモアの使用を避けるのだと考えることが出来る。すなわち、3-2で見られた「相手との関係性によって攻撃的ユーモア使用を調整する」という行動に加え、「同じ相手であっても、その都度の相手の状態を考慮し、攻撃的ユーモア使用を調整する」という行動をとっていることが推測される。

4. 総合考察

本研究は、大学生の攻撃的ユーモア使用について調査を行った。結果より、まず、攻撃的ユーモアとは見かけこそ「攻撃」の形を取ってはいるものの、相手と仲良くなりたいという親和動機の下で最も多く用いられていることが示された。これは、Norrick (1994) [3] が述べているような、「あなたをからかえるほど親しみを感じている」という間接的メッセージによる効果を、大学生がコミュニケーション場面において利用していると考えることができる。

このように攻撃的ユーモアは、相手へ感じている親しみを表明するための便利な道具として使われている。一方で、使う相手やタイミングを間違えてしまうと、相手を傷つけてしまったり、関係を悪化させてしまうなどの大きなリスクがあるものでもある。この点について、大学生は相手との親しさや相手の感情状態によって、攻撃的ユーモアの使用を変えている可能性が示された。このことから、大学生が相手との関係性や今の相手の状態を注意深く観察しながらコミュニケーションをとっていることがうかがえる。

しかしこのことはあくまで発信者側の使用動機であり、それが受け手側にどのような影響を及ぼし

ているかは本研究では検討できていない。今後は、こうした親和動機の下での攻撃的ユーモア使用頻度が、実際の友人関係にどのように影響しているか検討することが望まれる。

攻撃的ユーモアを使うことは、コミュニケーションにおけるメリットだけではなく大きなリスクを併せ持っているからこそ、その使用には難しさがつきまとう。今後は、上記で示されたような調整が上手くいかない場合にも注目して研究を行うべきである。当然のことではあるが、受け手が「攻撃」と受け取ってしまえば、それは両者の関係性の悪化へとつながってしまう可能性がある。このような攻撃的ユーモア使用の背景要因についてさらに深く検討することで、友人とのコミュニケーションがうまくいかずに悩んでいる児童生徒や学生に対し、何らかの支援の方法を提供できる可能性がある。

5. 引用文献

- [1] 上野 行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, 7, 112-120
- [2] 上野 行良 (1993). ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係 心理学研究, 64, 247-254.
- [3] Norrick, N. R. (1994) . Involvement and joking in conversation. Journal of Pragmatics, 22, 409-430.
- [4] 塚脇 涼太・越 良子・樋口 匡貴・深田 博己 (2009). なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか? —— ユーモア表出動機の検討——心理学研究, 80, 397-404.
- [5] 塚脇 涼太 (2011). ユーモア表出の類型ごとにみた動機の構造 広島大学心理学研究, 11, 49-56.

令和元年10月1日受理

“We are close”? An investigation about the using aggressive humor and its background

Kozue MIYASHIRO and Marin TOMITA